

小さな出版とシスターフッド — ミニコミ・同人誌・ZINE が育むコミュニティ

野中 モモ

女性の声は今も昔も十分には伝えられていないようです。たとえば、英オックスフォード大学のロイター・ジャーナリズム研究所が今年発表したりポートによると、世界の主要メディアで編集・報道局長などの編集トップ（トップエディター）を務める女性の割合は、米国が最多で43パーセント。以下、英国、フィンランドと続き、日本はゼロなのだそう。何をもち「主要」とするかには議論の余地があるとはいえ、メディアにはこの社会全体に染み渡ったジェンダーの不平等がとりわけ濃く反映されています。

そんな不利益を被りやすい環境にあって、女性たちはこれまでずっと自主的に自分たちのためのメディアをつくってきました。今日でも、ミニコミ、同人誌、リトルプレス、無料の場合はフリーペーパーなど、さまざまな名称で呼ばれる少数数の出版物が、マイノリティの声を伝え、コミュニティを育む場として機能しています。出版社から発行された本や雑誌が取次業者を通して全国の書店の棚に並ぶ商業出版のシステムの外側で、個人によってつくられ、広がり、読まれる小さな出版の営み。英語では、こうした自主出版物が「ZINE」（ジン、ジーン）と呼ばれます。雑誌すなわち「MAGAZINE」（マガジン）から、同好の士がつくって読む「FANZINE」（ファンジン）が生まれ、そのうち印刷技術の進化と内容の細分化・多様化を経て「ZINE」という名称が定着しました。

自主的な出版活動といえば、日本では漫画同人誌の文化が圧倒的な規模に育っています。そこではオリジナル作品の創作以上に既存の漫画やアニメ、ゲームなどのファン活動として行われる2次創作の人气が高く、あくまで娯楽としてとらえている人びとが多いようです。しかし、それも商業的な要請に縛られない自由な表現と批評を志向し、DIY（ドゥ・イット・ユアセルフ）精神を重んじるZINEの文化と地続きのはず。そうした「誰にも頼まれていないけれど自分がやりたいからやる」意欲こそが、世の中を少しずつ変えてゆくと思うのです。



PROFILE

のなかもも：ライター、翻訳者（英日）。訳書にナージャ・トロコンニコワ『読書と暴動 フッシー・ライオットのアクティビズム入門』（ソウ・スウィート・パブリッシング、2024）、カイ・チェン・トム『危険なトランスガールのおしゃべりメモワール』（晶文社、2024）など。著書に『デヴィッド・ボウイ 変幻するカルト・スター』（筑摩書房、2017）、『野中ももの「ZINE」 小さなわたしのメディアを作る』（晶文社、2020）など。